

長崎県文化財調査報告書第14集

里 田 原 遺 跡 (図 錄)

1 9 7 2

長崎県教育委員会

発刊のことば

里田原遺跡については、昭和47年度の発見と緊急調査以来、その重要性が広く知られてきたところであります。内容細部については調査が緒についたばかりで、現在予察される埋蔵状態の広さによって、今後にまつところも多いのであります。引続いて実施中の諸調査にもとづいて保存保護策が進がれるところであります。

現在、発見地点は県の史跡指定と保存保護のための公有化が実現したところであります。今後とも里田原全域の様相を早く把握していくことが必要であるとともに本遺跡の発見が開発事業を契機になされたという、もっとも今日的問題点も痛感されるところであります。

このたび、現在までに実施してまいりました緊急調査のあらましについてその概要報告書を発刊するにあたりまして、困難な諸条件のなかで、地元の絶大なご協力と直接間接に調査指導をいただいた研究者、及び、調査に参加いただいた関係者の各位に深く感謝の意を表する次第であります。

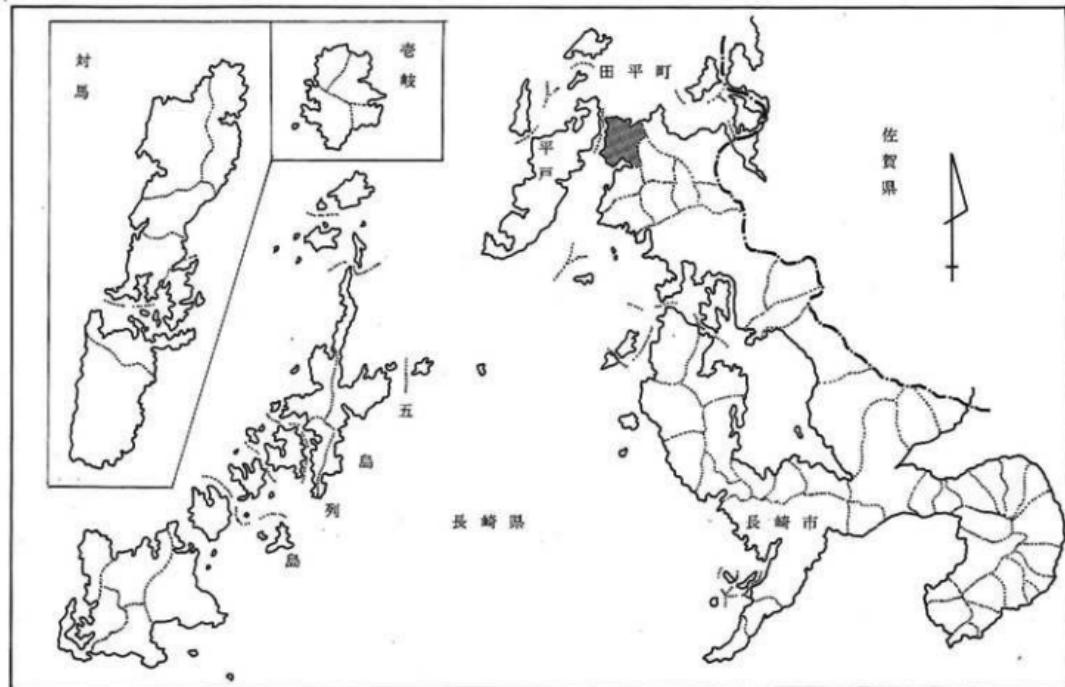
昭和48年3月 日

長崎県教育長 宮田藤臣

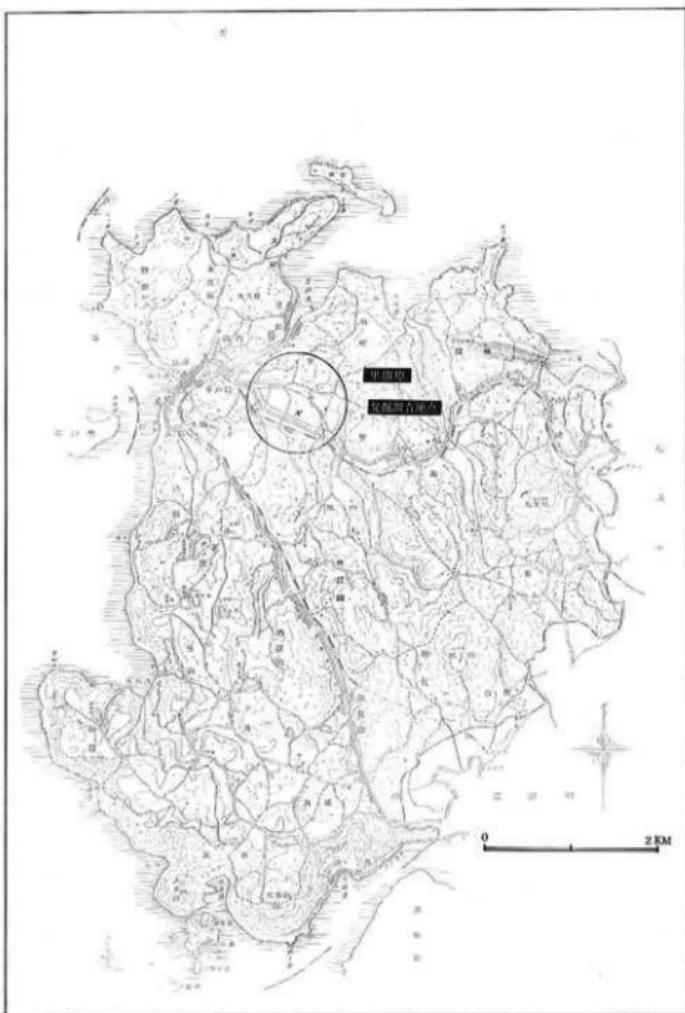
例　　言

1. 本書は、長崎県北松浦郡田平町所在の里田原遺跡について実施した緊急発掘調査及び緊急試掘調査の図録である。
2. 調査は昭和47年中に実施したものであるが、昭和48年3月実施の緊急試掘調査については後報にゆずった。
3. 本文編についても、昨夏の緊急発掘調査が期間内に十分進捗せず多くを残したまま、急ぎ保存を計るべく中断されたので、細部研討の諸点については割愛した。
4. 本年度調査は、至過の項に記した内外諸賢には多大の教示をいただいた。

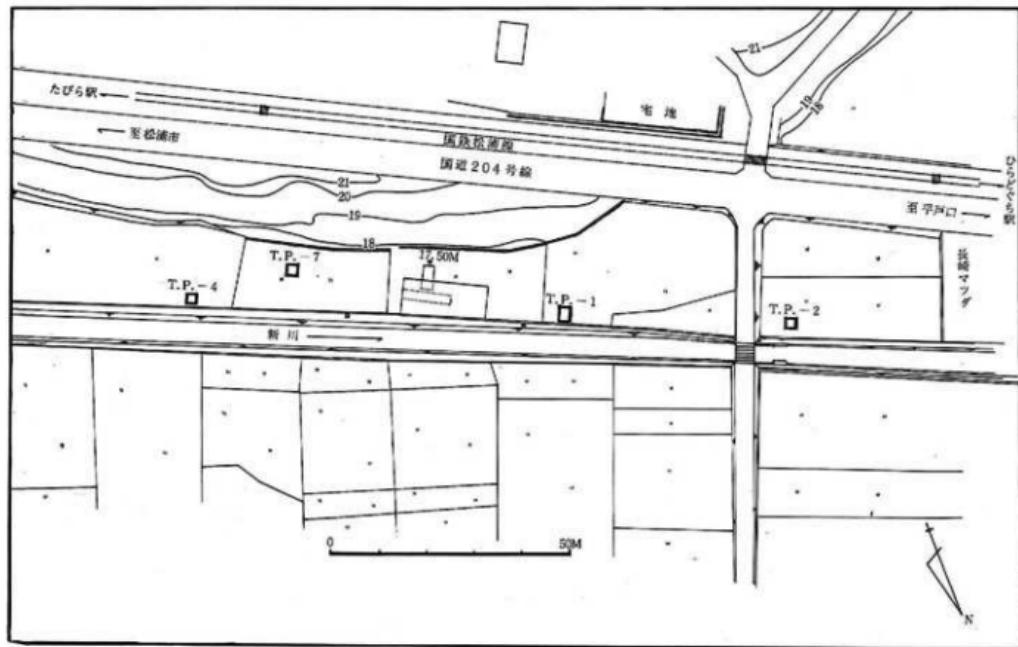
田平町の位置



田平町圖



発掘および試掘地点



調査の経過

「里田原」は、長崎県北松浦郡田平のはば中央に位置する約40haの水田地帯の総称であり県北地域の有力な穀倉地帯となっている。周辺は微高地に囲まれ、域内は古くから支石墓の散在でしられ、ときおり表面採集される遺物等よりして、分布・態様不明ながら、広大な先史遺跡の埋蔵が予察されていた。

一方同地域は、水田地帯の南辺の二級国道204号が県北の幹線である好条件もあって開発の構想も多く、一部具体化している状態にあるため、埋蔵文化財の包蔵実態の把握が急務とされていた。

長崎県教育委員会は埋蔵状態を把握するとともに、急激な開発に対処すべく、昭和47年度において分布及び試掘調査を計画し、国庫補助を得て昭和47年10月に実施を計画していた。

第1次調査（緊急発掘調査）

昭和47年7月22日、「里田原」の南辺を東西に走る国道204号線ぞいの一帯においてガソリンスタンド用敷地造成工事が基礎掘りされた際、水田の一隅において土器・石器及び木片等が出土し、発見者である県立鹿町工業高校教諭木山昭雄氏、県立猪俣館高校生中村和正君によって田平町教育委員会経由で県文化課に急報された。工事主体、中福石油、同工事者と地元教育委員会・発見者の協議によって工事は中断され、緊急調査が田平町教育委員会によって要請された。急報当日、県文化課は担当者を現地に急派踏査した。その結果、同地点は弥生時代の低湿地遺跡にかかることが指摘され、県教育委員会・地元町教育委員会及び工事主体中福石油社長中村馨氏が協議のうえ緊急発掘調査が立案実施された。調査は県教育委員会及び地元田平町教育委員会が主催し、8月3日～同13日予定で実施したが豊富な内容がなお広く予察されたため、再度調査続行について関係者間で協議がもたれ、8月27日～9月13日まで調査を続行した。調査期間は前後半31日に及んだ。

前半調査は国道北側を西流する小川(新川)に南接して東西10m×2m、南北5m×2mの各トレンチをT字状に設定し、後半は、前半の調査区を含めて東西20m×南北7mに拡大して実施した。水田耕土下の茶褐色土層は深度約1mまで堆積し、以下に、現地で「カワラ泥」と称する青白色粘質土が見られたが、該粘土層は、新川にはそって北に急没し、充満した黒灰色砂質土と一線を画して汀線状となり、図示する遺物群はこの黒灰色砂質土中に包含されていた。また遺構群は青白色粘土層の急没する汀線（？）内側に並行して検出された。これらの遺構を含む調査区を精査することのみを考えても、なお相当の期間と補完すべき諸条件があると判断され、後半調査の中途で緊急に現地保存の諸措置について関係方面の協議がおこなわれた。

県教育委員会は、田平町当局者と遺跡地の緊急な公有化について協議のうえ、工事主体中福石油社長中村裕氏と接渉を続け、その結果、該地番の公有化が実現した。その後、現地は県史跡として緊急指定され、昭和48年2月7日付で告示された。この間、田平町関係者の努力の他、多面的努力、中福石油関係者の理解に負うところが大きかった。

第2次調査（緊急試掘調査・国庫補助事業）

緊急発掘調査の対象となった地点は多くを近い将来に残して公有化が実現したが、なお開発予定も急であり、特に国道ぞいの一帯は1次調査地点との関連の有無・包蔵の態様について把握する必要があり、国道ぞいの一帯を中心として緊急試掘調査を国庫補助を得て実施した。調査は昭和47年12月15日～同25日（11日間）実施、国道ぞい一帯、「里田原」北縁微高地、国道南部の水田及び微高地を対象とした。低湿地遺跡の分布、及び微高地について住居跡等把握を目的としたが後者については確証を得るに至らなかった。試掘坑は3m×3mの規模とし計12箇所99m²について実施した。矢板状平杭列及び矢板状材を認めた第2試掘坑について図示した。

第3次調査（緊急試掘調査）

緊急発掘地点の西隣地については第2次において試掘坑1箇所を設定し、棒杭列等を観察したが、同地点は広域消防團用地に予定されたため、調査のための資料をさらに必要とした。このため、昭和48年2月14日～同17日の4日間、試掘坑5箇所を設定して実施した。（T.P. 12～T.P. 16）この回の試掘坑にあっても棒杭列の一部が見られた。なお、該地番は田平町によって公有化され、消防團敷地造成は中止され保全されている。

第4次調査（緊急試掘調査）

田平町による工場誘致策として、「里田原」西半部に、エミネントスラックス工場が建設予定され、公表されたが、同予定地は、第1次調査（緊急発掘調査）によって認められた水稻栽培に関する諸資料に直接する耕作跡が予察される低湿地帯である。前次までの調査は諸制約あって、新川以北の実査に至らなかったが、今次は、はじめて試掘坑の設定となった。本書編集の段階ではその資料を収録するに至らないが、機をまって報じたい。但し、本次までの諸資料及び本次の検土状況等の結果によれば、新川以北の低湿地帯において水田跡の検証される可能性は強く予察される点を付記したい。

第4次までの調査参加者

正林謙・田川肇（以上県文化課）、本山昭雄（県立鹿町工業高校教諭）、力武一成・岡村広法（以上県文化財保護員）、他に地元の方々には、多くの参加を得た、記して感謝申しあげます。

以上の他に、地元田平町当局及び同町教育委員会の方々には諸点でご苦労いただいた。また、調査に当っては、県文化財専門委員石丸太郎氏、九州大学教授岡崎敬氏、九州産業大学教授森貞次郎氏・同校講師土田充義氏、国学院大学講師麻生優氏には多くのご教示をいただきました。感謝申しあげます。

第1次調査（緊急発掘調査）

1. 里山原全景（南より）↑は第1次測量（緊急測量）地点



2. 近景（北より）

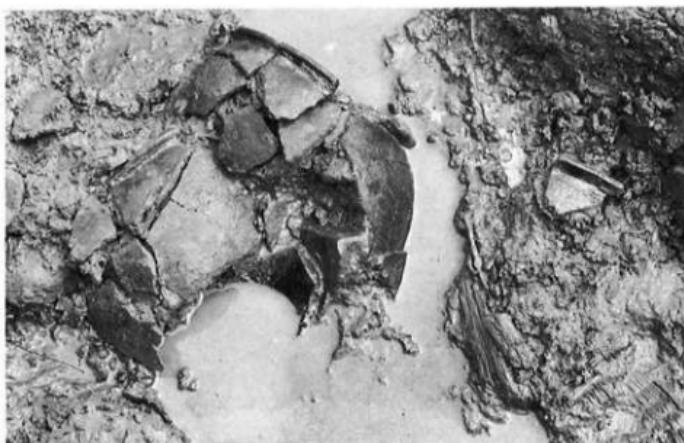


3. 調査風景



遺物出土状況

4. カメ形土器の出土状況（黒灰色砂質土層）



5. 広口ツボ口縁部の出土状況（黒灰色砂質土層）



6. ノミ形石器の出土状況（黒灰色砂質土層）



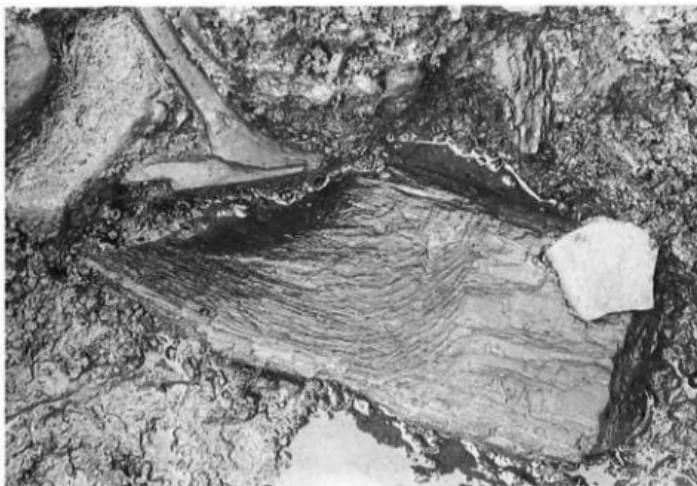
7. 砥石の出土状況（黒灰色砂質土層）



8. 木器出土状況（黒灰色砂質土層）



9. 平歛木製品と手斧の出土状況（黒灰色砂質土層）



10. 木製半弓出土状況（全長88cm）



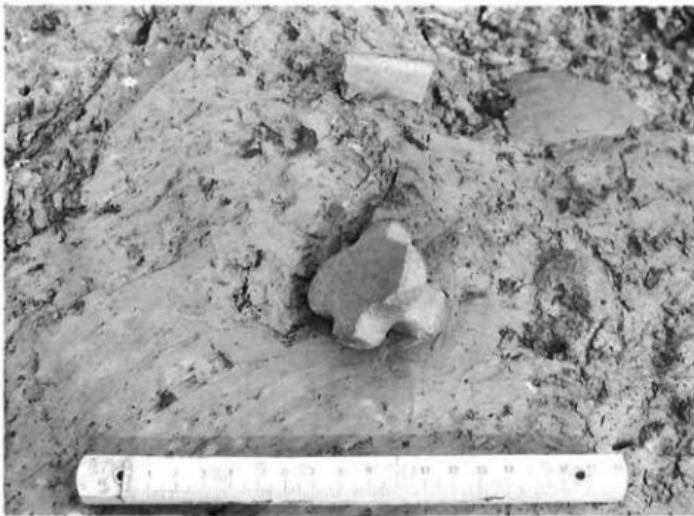
11. 箭の出土状況（右は水門様遺構）



12. 小ピット内におけるカシの実の包蔵状況



13. 把頭飾出土状況（黒灰色砂質土層）

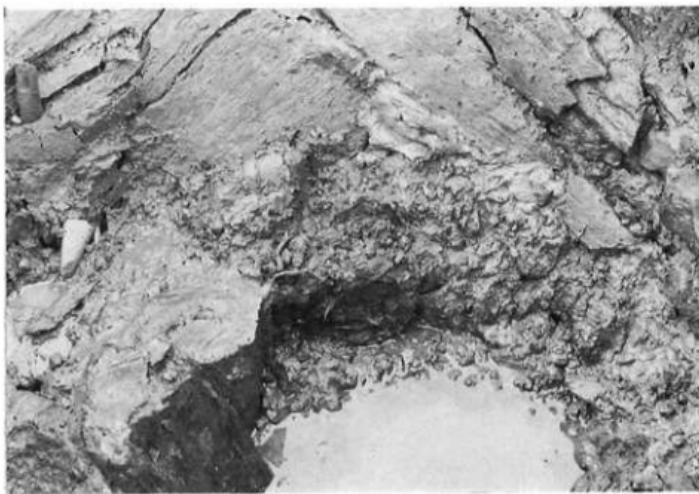


遺構出土状況

14. 第1ピット(手前)と水門様遺構



15. 第1ピットのツカ柱(?)と側壁の厚板材



16. 水門様遺構



17. ピット群 (右から第1.2.3.4.5.号)



遺物

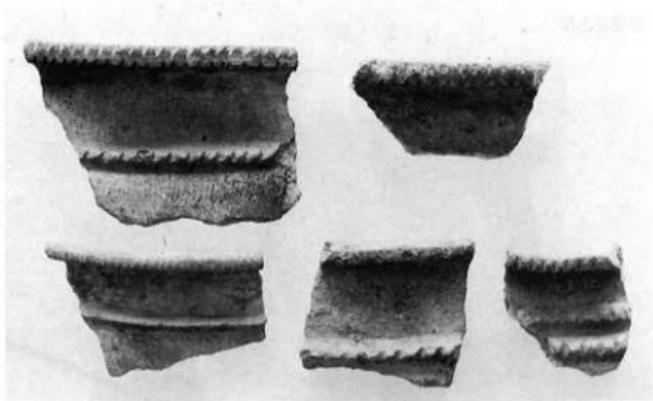
18. 弥生式土器



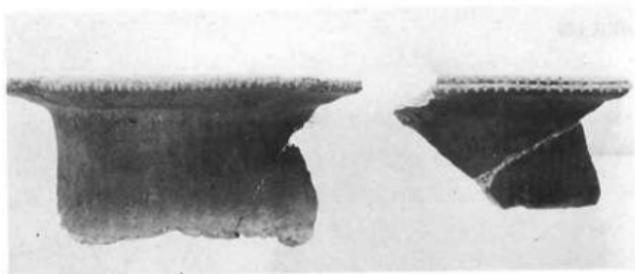
19. 弥生式土器



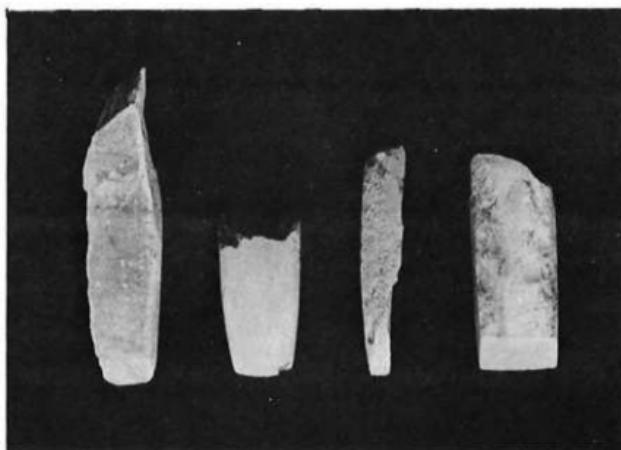
20. 弥生式土器



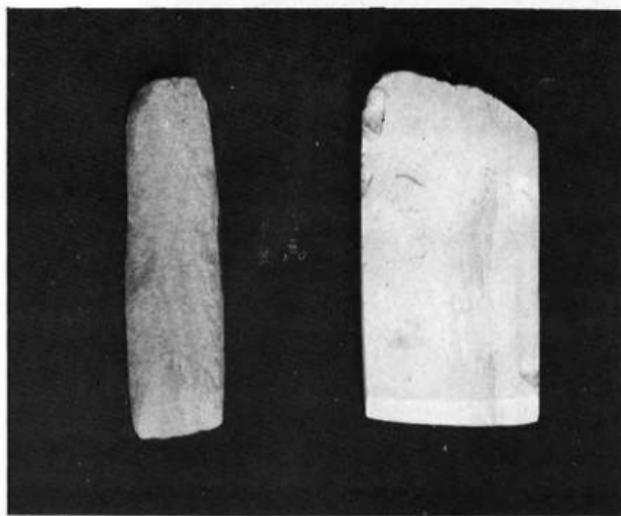
21. 弥生式土器



22. 厚手ノミ形石器



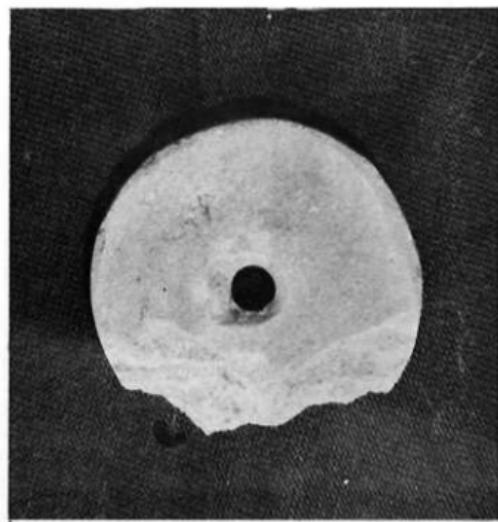
23. うす手ノミ形石器



24. 方柱状片刃石器



25. 紡垂車



26. 剥片石器（サヌカイト）



27. 石 砺



28. 給刃磨製石斧



29. 圓 石



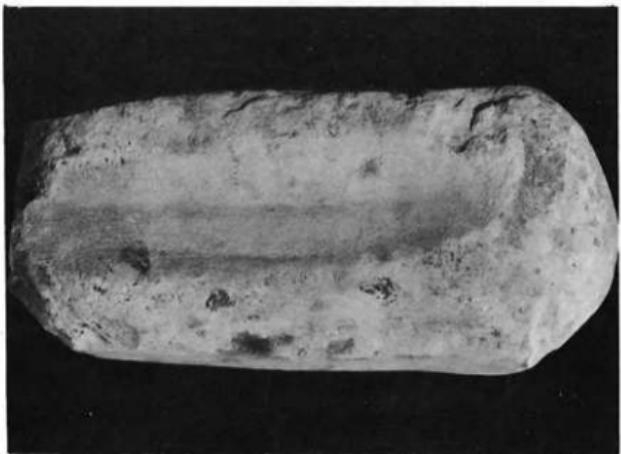
30. 石 斧 丁



32. 砧石 (B面)



31. 砧石 (A面)



33. 34. 把頭飾



(上面)



(側面)

35. 手斧



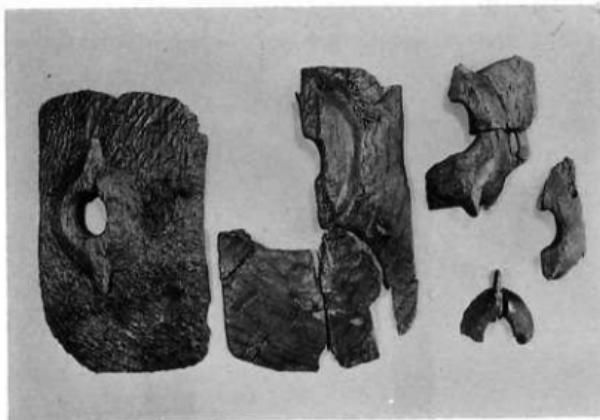
36. 手斧ソケット部



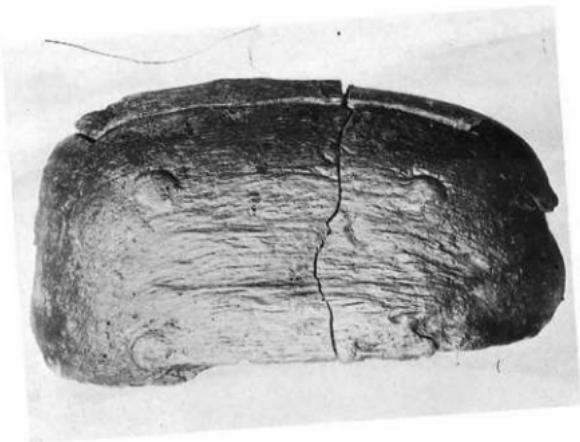
37. 平 錐



38. 平錐及び軸柄装着部



40. 槌 (裏面)



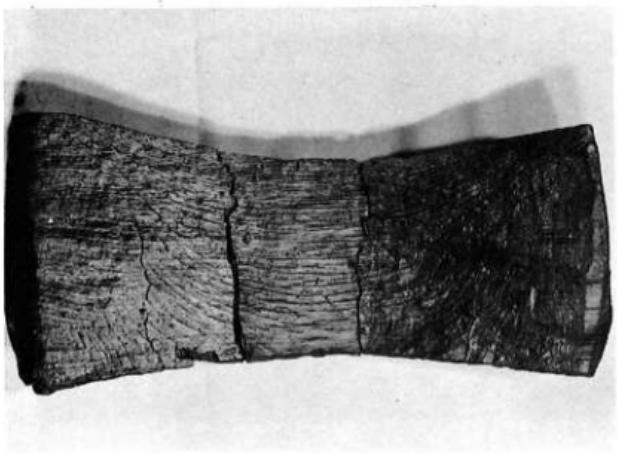
39. 槌 (表面)



41. 平端木製品



42. 平端 (背面)



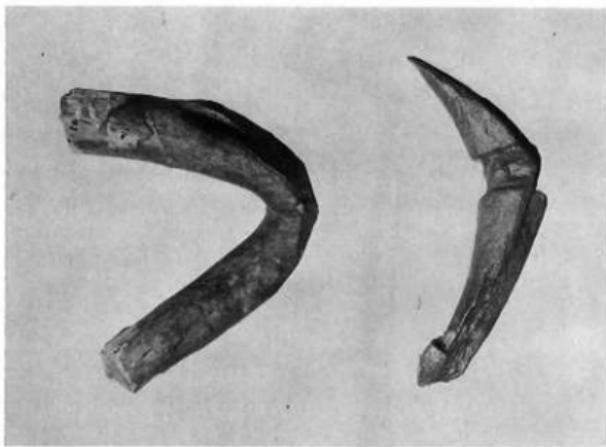
43. 手斧未製品



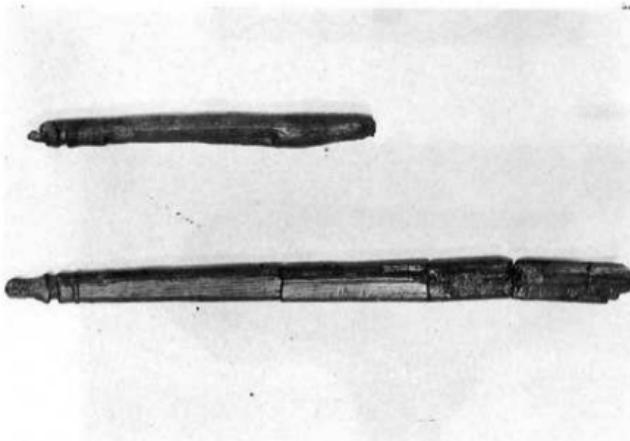
44. 手斧柄頭部

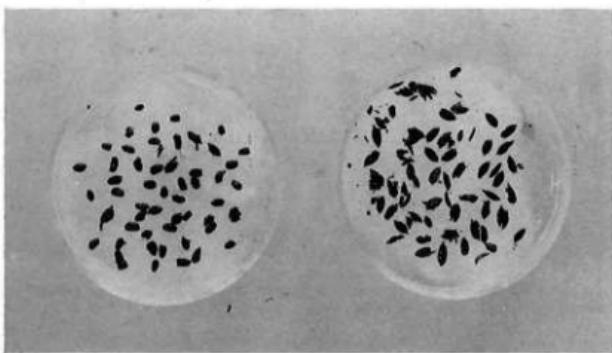


46. 異形木器



45. 弓



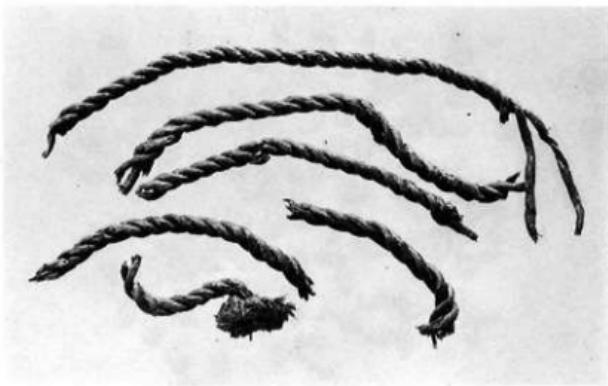


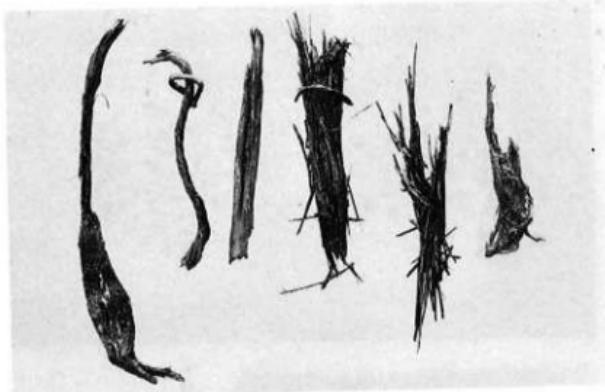
↑ 47

コメと
穀

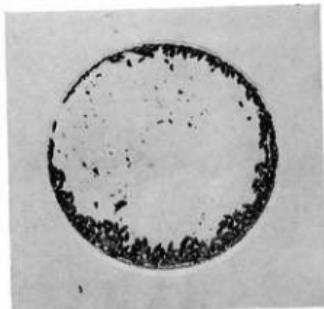
←48 ムシロ状ワラ工品

↓ 49 棍 (麻)





†50 各種のセンイ (右端はワラ)



← 51 瓜科食物種子

↓ 52 ドングリ



第2次・第3次調査（試掘）

53. 試掘風景（第1試掘坑周辺）



54. (第1試掘坑の木杭列)



55. 第2試掘坑の矢板列と矢板材（黒灰色砂質土層）



56. 第2試掘坑における木器出土状況



57. 第3試掘坑における、木杭等の出土状況（黒灰色砂質土層）



あ　と　が　き

里田原の試掘調査を昭和47年度の国庫補助事業として計画していた矢先に緊急発掘調査を要する事態が発生して半年余を経過した。その間、発掘地点の県指定と公有化が実現したが、試掘結果によれば、同地域一帯に予察される埋蔵状態は広く、問題点は遺跡内容自体の他にも山積している。隣県佐賀の土牛遺跡等、九州各地の低湿地遺跡の調査研究の中で里田原遺跡を考えるとき前途多難を考えざるをえない。

本稿編集の主たる対象である県指定地点の調査についても十分進捗していない現在、靴下搔痒の感を自戒する次第であるが、主要遺構・遺物について、注目される諸点を概略図示するとともに、今後の調査について諸方の教示を得る資料としたい。今後、里田原遺跡については保存科学の仙闘連諸学者の網羅なくして進展不可能であるが、遺跡の将来についても教示を切望したい。

里田原の諸調査と本書の編集等、正林・田川が担当したが、経過の項に記した諸方には再び教示と協力に感謝の意を表したい。

1973・3・28

(正林・田川)